

---

# 女神の居ぬ間に

猫田

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

女神の居ぬ間に

### 【Nコード】

N7153U

### 【作者名】

猫田

### 【あらすじ】

世界を見守ってきた女神が消えて、物騒になった世界での出来事。居なければ居ないで仕方ない、楽しく生きればそれで良い。私たちの話。

自分の趣味全開ですみませんかんじ。暇を見つけて書いていきます。

## プロローグ（前書き）

初投稿です。至らないところもありますが、よろしくおねがいします。

## プロローグ

この世界がいつ生まれたか、誰も知らない。

ここに暮らす人々は、己の住む土地があり、町があり、家があれば問題ない。

そして神のように崇めている女神がいれば  
大きな災害もなく魔物による虐殺もなく、心静かに暮らしていけると信じていた。

その女神がいなくなるまでは。

数百年前、女神が姿を消した。

この大陸の一番古くからの歴史があるシザンサス帝国の首都にある、白い塔。

クレオメの塔の最上階に女神は住んでいた。

この世界を作った創造神により、結界の張られた塔の上で人を守る役目を持ったという。

女神が姿を消してから凶暴な魔物が各地に現れるようになった。  
女神が姿を消してから国同士が国土を求めて争うようになった。  
女神が姿を消してから・・・

なぜ、と。

女神は人間を見放したのか。

何かが女神の逆鱗に触れたのか、と。

人々は女神を渴望する。

女神が居なければ生きていけないのではないのか、と。

絶望に打ちひしがれていたところに一人の人間が立ちあがった。

「今こそ生き延びるための試練の時。ここはわれらの住む場所、われらの世界。

いつか女神が戻ってきてくれると信じ、この世界を守ろうではないか――！」

シザンサス帝国の王子だった彼はそう言って国を建て直し始めた。

何百年経とうとも人の願いは変わらない。  
誰もが願う、女神の再来を。

## 第1話

目の前を蚊が飛んでいく。

最近の拠点としていたエルビナの街から歩くこと4時間、一向に目的地が見えずにため息をこぼす。

うつそうと木々が茂る森の中、目指すは古代の神殿である。

「…デマだったとか？」

ぼつりと洩れた言葉。

男の名前はシオン。冒険者ギルドに所属しているAランクの剣士である。

赤い髪と黒い目に剣を振ってきただけの事はある筋肉。

それなりに御嬢様方にもてそうな外面だったが、何故か内面は学者肌。

3度の飯より古代遺跡が大好きという変わり者。

剣士の腕は、遺跡を一人で気楽に回りたいが為に覚えたという阿呆な努力家。

彼は3日ほど前に情報屋からこんな話を聞きだした。

曰く「エルビナの近くの迷いの森に、遺跡と女神が眠っている」と。

「なんでも女神の搜索のためにシザンサス帝国から騎士団が来ているらしいよ」

噂の範疇を出ないのに騎士団なんてびつくりだね、と自称ベテラン情報屋の新米が笑いながら話してくれた。

シオンの眉間にしわが寄っていく。

（遺跡の価値もわからぬ彼らに先を越されてなるものか！十中八九踏み荒らされる！）

女神という単語を綺麗にスルーしているが、彼は気にしない。気付かない。

そして、本物かどうかあやしい地図を銀貨2枚という高値で購入し、今に至る。

（だが、ここには神殿があつたのは確かだ）

空气中、動植物、この世界のすべては『マナ』というエネルギーの恩恵を受けている。

木々の成長や、魔獣の強さはマナの吸収に左右されているといってもいい。

もちろん魔術の行使に必要な魔力もそうである。己の中にあるマナを使って魔術を使用したり、大気中にあるマナを使って魔術を使ったりする。

昔からマナの多い場所に神殿が建っているのはよくあることだ。なぜなら、そこには精霊が居ると言われているからだ。

精霊の恩恵を受けようとそこに彼らを祀る神殿を造る。

ま、本当に居るのか怪しいのだが。ぶっちゃけ気分の問題だ。居るような気がするという。

今シオンが立っている場所には空気中のマナの含有量が他の場所に比べてかなり多かった。

その所為か木々の茂り方も尋常ではない。

ここまでマナが多いと神殿があつたのは確かだろ、と心が弾む。

両手で己の頬を叩き、気合を入れる。

ふと見えた手のひらには蚊が圧死していた。

それが見えた途端入れた気合が急速に出て行ったようで、また盛大な溜息を吐くと、重い足取りで森の奥へと入って行った。

## 第1話（後書き）

短くてすみません。

## 第2話

寄ってくる蚊をはたき落としながら黙々と進んでいたシオンがそろそろ本気で帰ろうか悩み始めた頃、ようやく遺跡の端っこが姿を現した。

古代の建物のはずなのに、まるで今造られたばかりのようなめらかなさわり心地と傷ひとつないその姿。

「おおーう」

だらしなく目と口元が緩んでいる。

誰か他に居たならば、『気味が悪い』と言わずにはおれない表情だが、幸いにも今は彼1人だけだ。

なでなでと柱を撫でまわし、鞆から本を取り出して独り言を呟きながらページをめくる。

「約300年前のもので間違いなさそうだな。

ロシーナ地方にもこれと同じ石材を使った神殿が300年前って言われているもんな」

こことロシーナ地方の距離は……ってことは、碎石場は……

と、相変わず思案顔で呟きながら、手に持っていた本を鞆にしまいこみ、歩き始める。

神殿を正面から見ると、乳白色のつやめく石柱がシンメトリーに並んでいる。

そして建物の中からあふれ出てくるように水が流れ出て小川をつくり、石柱のわきに池をつくっていた。

「こりゃ水の神殿つてところか」

そう言つてシオンは神殿の中に足を踏み入れた。

「うーん、思つていた以上に何も無い。ホントにない」

あたりを見回しながら残念がる。

シオンは何かしらの文字やら紋章やらを期待していたのに、何部屋か通り抜けた最期の部屋は何もないただの空洞だった。

こういつた神殿の最期の部屋はだいたい祈りの場と呼ばれ、石の台座があつたりするのだが、それも無い。

それでもここへ来るまでの苦労を思い、念入りに調べてみると、奥の壁に何やら文字が書かれているのが見つかった。

「古代文字かー！」

ぐふふ、と笑い声を上げながら、鞆の中からまたもや本を取り出し、古代文字の解説に乗り出した。

1時間くらいそうしていただろうか。

「解読完了ー、おめでとう」

そう言って本から顔を上げた。

「えーと？目覚めの合図は朝に啼く声……って、何の意味があるんだ？朝に鳴くって言ったらあれだろ、鶏。『こけこっこー』なーんて……」

そのとたん地鳴りが始まった。

部屋全体が揺れている感じがし、立っていらなくなり膝をつく。天井から埃と砂がパラパラ落ちてくる。

そして古代文字が書かれていた壁がパズルのように左右に動きだし、もう一つの部屋が現れた。

（クイズ？ってか、そんな阿呆な扉のカギってありなの？……気分的にはあれだよな、開けゴマ）

オープンセサミじゃなくてよかったなーと混乱し始めた頭で現実から逃げてみたが、

部屋の中の様子がシオンを現実に戻させた。

「人?!」

その部屋には寝台がひとつあった。

お姫様が寝るような天蓋付きの豪華なベッド。

べつどからもぞりと起き上ったのは少女。

艶やかな漆黒の髪に銀色の瞳、幼さは残っているが、見た目的には15歳くらいだろうか。

透き通るような白い肌に真っ白なワンピース。

まるで天使のような精霊のような浮世離れた雰囲気を持つ彼女。

くわっ、と欠伸をしながら目をこすり、茫然とつつ立っていたシオンに目を向けた。

そして言葉を紡ごとく口を開き、

「ぐぐうーるるうう……」

と、盛大にお腹を鳴らしたのだった。

### 第3話

目の前にはもくもくと人の携帯食を食べ続ける女の子がいる。色々と聞きたいことはあるのだが、なんだか話しかけずらい……と言つか、食事に夢中で声かけても気付いてくれそうにない。

（ああ、俺の携帯食が……）

どんどん女の子のお腹へと消えていく食糧に、今日街に帰るまでの携帯食だけは取っておかなければ、と考えるシオンであった。

「本当にすみません」

あれだけあった食べ物は今紙屑と化している。さすがに我に返ったらしい女の子は顔を赤く染めながら俯いている。

「えーと、君は何でこんなところにいたの？」

シオンはなるべく優しく尋ねる。だって見るからに泣きそうだ。

まあ、初対面の異性に腹の音を聞かれたらな……しかも携帯食ほぼ

食べてしまったらな…

「すみません、分かりません」

「……いつからあそこにいたの？」

「さあ？」

「……あそ」

何やら雲行きが怪しくないですか？

いけないもの目覚めさせたとかですか？

「あつ」と女の子が声をあげた。  
そしてニコリと微笑みながら言った。

「名前だけなら分かります。

ユエと言います。よろしくお願いします」

(…よろしくって)

巻き込み前提で話が進んでいる気がしてならないシオンはそっとため息をついた。

「とりあえず、ユエ。」

こんなところじゃ話もできない。街に帰るから。だいぶ歩くが大丈夫そうか？」

早々に帰りたくなつたので帰ることにした。  
携帯食もないし。

ただ、細くて体力もあまりなさそうなユエが4時間以上歩けるか心配だった。

途中休憩はとる予定だが。

「はいっ！頑張りますす！」

はい、頑張つて下さいね。

ふたりで神殿から出ると、ものすごいスピードで、横の石柱の陰から武装した人達が飛び出してきて、あれよあれよという間に囲まれてしまった。

ただし、盗賊とか冒険者とかいうような団体ではない。  
ちよっとキラキラしてる感じ…

(どう見ても騎士団ですよね)

ユエはよくわからない様だが、シオンの後ろに隠れるようにして服にしがみついている。

騎士団の中のどうやら隊長と思われる人物が目の前に出てきた。開いているのかわからないくらい細目。見た目、筋肉のぶつかり合いよりも頭脳戦のが得意そうな男。

騎士団の隊長とかより宰相のほうが似合いそうだ。

彼は一度ユエに目を向け、そしてシオンの方へ目を向けて口を開いた。

「申し訳ないのですが、そちらの彼女、私達に渡していただけないでしょうか？」

「……理由は？」

「そちらの方が女神だという文献が先日出てきましたね。お迎えに上がった次第です。…渡していただけますかね？」

女神？こいつが？と、驚きユエを見ると、彼女も驚いたようで目を見開いてポカンとしていた。

シオンが見ていることに気付くと、困惑したような顔でふるふると首を振り、ギョツとしがみついていた。

ここでNOなんて言えば、全身に穴が開くのは目に見えている。が、何だか放って置けない。

どうしようかと思案していると、頭上から声が降ってきた。

「あー、その子、こっちに渡して欲しいんだけどなあ……駄目かね？  
青年？」

頭からぼろ布を被った第3者。

(三つ巴…！)

かなり厄介なことになりそうな予感に、シオンは何だか胃がキリ  
キリしてきたのだった。

### 第3話（後書き）

小説作ったら保存できなくてどうしようかと思った…。  
…直ったけど。

## 第4話

シオンを青年呼ばわりしたやつは、声からして女性の様だ。どうやってこの状況から脱出しようか考えていると、頭上のやつがシオンに向かって何かを投げてきた。

目の端にそれが目に入る。

透明なガラスに似た石。

シオンは慌ててユエに被さる様にして、体勢を低くする。もう地面にくつつくくらい。好きで地面とキスはしたくないが……

ユエはシオンに潰されている。潰れた蛙のような声が聞こえた。痛々しい。

「ちっ！」

騎士団の隊長の舌打ちが聞こえる。

何かを回避するように、バックステップで跳ぶが、彼女は慌てず言葉を紡ぐ。

「らいつい  
雷墜」

バリバリと音を立てて石から雷が迸った。しかも広範囲に。ただし、シオンとユエは見事に避けて。

コンッと、石がシオンの頭に落ちてきた。顔をあげると回りには雷によって気絶した騎士団。

目線をもう少し上に移動してみる。

ぼろ布を外したやつが見下ろしていた。

見たことがある顔だった。

シオンは浮かべた苦笑をそのままに話しかける。

「なんて挨拶だよ、カーラ」

「あは。久しぶりー」

緑色の瞳に、焦げ茶色のさらりとした髪の毛を、後ろで緩くひとつに縛っている。

ぼろ布の下は着物の様な上着に膝丈のズボンにブーツという服装だった。

表情は嬉々として、楽しかったですと語っていた。

「あのー、おふたりは知り合いですか？」

神殿から降りてきたカーラに向かってユエが話しかけた。

「まあねー。私はカーラ。よろしく」

「私はユエと言います。よろしくお願いします」

仲良く自己紹介しあっていると思っていたら、カーラが爆弾を投下した。

「私、娼館に居ただけだね、シオンはそこにお客で来て知り合ったのよ」

ザッとユエがシオンと距離をとった。

その瞳にはなんとも言えない色が浮かんでいる。

これは確実に誤解している。

「ままま…待て！誤解だ！そうなんだけど、そうじゃなくて！」

手を伸ばしたが避けられた。悲しい。

カーラの笑顔が憎たらしい。後で本気で絞めてしまいたい。

「カーラは薬師の仕事で娼館にいたの！で、俺はその主人と馴染みで、主人に仕事依頼されて行っただけ！分かった？」

カーラの説明は所々抜けている。しかもそれを本人は分かってやっつてるからたちが悪い。

「え？あつ、誤解…ですか？……す、すみませんっ！！」

顔を真っ赤にしながら謝ってくれた。可愛らしい。

シオンにしてみれば元凶からの謝罪が欲しいところだが。

「そう言えば、さっきのは何だったんですか？」

「あれは、晶霊石晶霊石しょうれいせきというの。あれに魔術を仕込んでおけば、魔術が使えないやつでも術が打てるという代物よー」

晶霊石の値段はそれほど高くない。

中に入っている属性にもよるが、安いとコッペパンひとつくらいの値段で買えてしまう。

しかもサイズは人差し指の爪くらいの大きさで、使い方によっては高威力という優れたもの。

お手軽なアイテムだ。

「で？お前は何しにここに来たんだよ？」

「何しにつて、さっき言ったじゃない。ユエを貰いにつて」

一瞬で険悪な雰囲気きふくきがシオンから漂い出すが、それを見たカーラはパタパタと手を振った。

「ま、帝国の騎士団に渡さないのが前提なだけで、私がユエのそばに居られれば問題ないわけよ」

これからよろしく、と言われてしまった。

何がどうなってそれで問題ないのか分からなかったが、とりあえずこの疲れた身体と精神を癒したい……と切に願うシオンは、考えることを後回しにして、ふたりを引き連れ街へ向かった。

無論、騎士団はそのまま放置で。

## 第5話

エルビナの街。帝国領の外れに位置し、迷いの森や死の沼など、冒険者の格好のレベル上げの場所が近場にある。

故に、街には魔獣の素材がとろせましと売り出され、小さい街ながらかなりの賑わいを見せていた。

その街の中の下くらいの宿、『夜中の鶏亭』の1階にある食堂に3人プラスひとりは座っていた。

「……ストーカーみたいです」

「騎士団の隊長がストーカーなんて最低。評判がた落ちー」

ユエとカーラの言い様に騎士団の隊長はうつ、と呻いて凹んだ。

その後、気絶から立ち直った騎士団は、彼らを追ってエルビナの街にやって来た。

隊長の名前はアシムといい、誰にも彼にも隊長なんて似合わない、と毎日のように言われている。

顔がそっくりの兄弟が文官などをやっているせいもあるかもしれない。

事は数日前、何時ものように城下町の見廻りやら新人の訓練やらデスクワークやら、雑務に追われていた。

そこへ皇帝陛下からの火急の要請が飛び込んできた。

曰く、『エルビナの街、迷いの森の奥にある神殿から女神を連れてくること』

事の詳細は不明だったが、どうやらクレオメの塔の女神が居たとされる部屋に、文字が現れたらしい。

そこに書かれた言葉が先程の皇帝陛下からの命令の文章だ。

そんなこんなで遙々王都からやって来たのだが、剣士に先を越されるは、ぼろ布被ったやつには気絶させられるは……

これじゃ王都に帰れないと、追ってきたら、ストーカー呼ばわり。

だが、ここで引いたら負けだと自分に言い聞かせ、背筋を伸ばした。

「ですから、クレオメの塔に神託があつたんですから。連れていくのは正当な理由でしょうが!!」

「あゝ、あ?こっちは女神が夢枕に立つたんだって言ってるでしょ!」

シオンはアシムとカーラの言い合いから早々に避難した。  
と言つても、椅子を少し引いただけだが。

つまり、なるべくふたりの視界に入らないようにしているだけともいう。

騎士団は、皇帝陛下の命令もあるので連れて帰らなくてはならないのも分かる。

「本当にそれが女神の言葉なのかも怪しいわ。ってか、連れていったら閉じ込めること必死でしょ!二度と女神を失いたくないって。そもそもユエが女神だっていう証拠もないし。女神かどうか確かめる…なんて言つて変な実験に付き合わされたりとかされるかもしれないし!って、聞いてんのかゴラァ!!」

カーラの滔々としやべる気迫に仰け反るアシム。

だが負けじと机をバシンと叩きながら立ち上がり反論する。

「ですからっ……!!」

(いつまで続くのかな、これ)

話に付いていけなくなったユエとシオンは白熱するふたりをそのままに先に部屋へと戻っていった。

それから数時間後、カーラはアシムを伴い部屋に戻ってきた。ふたりの表情でどちらに軍配が上がったのかわかる。

「とりあえず、この方はあなた方に預けます。戻って陛下や宰相と相談し、今後について決めさせていただきます。ですが、こちらにしても目を離すわけにはいきませんから、監視を付けさせてもらうことになりました」

「監視？あんたがか？」

「いえ、そうしたいのはやまやまですが無理なので、私の子飼の傭兵を」

1週間後にその傭兵がここに来るといふ。

監視などというのは気に食わないが、両方の折り合いを付けたらそれは仕方がないと思うておく。

さすがカーラ。よく向こうに妥協させた。後で誉めておこう。

「ユエ、そーゆーことだから、女神様のいう通りに私が守ってあげるわね。シオンや私とたくさん色々な所に行って冒険とかしましょ」

「はいつ！楽しみです！」

そんなこんなで、シオンは女の子ふたりと冒険をするようだ。巻  
き込まれ決定らしい。

男の子のあこがれのハーレムみたいだし、ま、いっか。

「ってことだから、シオン。ユエに装備一式買ってあげて」

……下僕扱いですか？

## 第6話

懐の財布の中はだいぶ寂しくなっているが、ユエの装備はなんとか買えそうだ。

……下の上くらいならなんとか……カーラの文句付きでお買い上げな感じになりそうです。

そういえば、とシオンはカーラに尋ねた。

「お前さ、女神様からユエの事何か聞いてないの？どこの誰かとかさ」

「……子供だって」

「は？」

「いや、だから、子供。女神様の子供」

それって女神様の血縁者って事ですよね？

「アシムに悪いことしちゃった？」

女神様の血縁者ならば、何かしらの能力というものがあって、よくわからないが、クレオメの塔に連れていけば世界がまた平和に戻るとか。なにせ女神様もあの塔で人々を見守ってたと言っし。

……なにやら世界の平和を思いっきり先伸ばしさせた感じがする

のですが。

「ああ。血縁者だからといって世界の平和とやらには直接関係無い  
そうよ」

シオンはもうひとつの疑問を口にした。

「ユエは誰かに狙われているのか？守れって言われたんだろ？」

「誰とは言わなかったわ」

まあ、でも。と、ゴロリと寝台に寝転がりながらカーラは続ける。

「適度を守ってあげるって言っというた」

女神様にまでこの言動。こいつの性格は適当だったと思い出した。  
適度ってどんなだよ。

「そういえばお前、遊廓での仕事は？こんなところにいて良いのか  
？お抱えだろ」

カーラの職業は冒険者ではなく薬師だ。いつも、たくさんの引き  
出しの付いた木箱を担いで諸国を回っている。

ちなみに、先程の神殿では手ぶらに見えたが、実は神殿の陰に隠  
していたそうだ。あんなのを担いで表れるのはちょっと抜けてるし  
変だろう、と思ったらしい。そこまでやらなくても……と思ったの  
は秘密だ。

「薬の材料の在庫が無くて。この街に採集に来たのよ」

王都の一角にある花街。通称ヨシワラ。各所に点在する娼館とは少し異なり、昔から独自の文化を築き上げてきた場所だ。

人は皆『ワフク』という袖が長く、襟の部分を前で合わせ、帯で縛るだけという服を着ている。

簡単に見える服だが、柄や装飾に凝っており、華美絢爛な服なのである。

呼び方も少し異なる。娼館を遊廓と呼び、娼婦を遊女、くらいの高い娼婦を花魁という。

そのヨシワラで初めてカーラとシオンは出会った。

忘れもしない。強烈な出会い……

初めて会った時、遊廓の前で数人の花魁と一緒に（たぶん客だと思われる）男を袋叩きにしていた。

それはもう楽しそうに。どこぞを切り落とそうか？……なんて話は聞かなかったことにした。他人事なのに思わず手で隠した。

後で聞いた話だが、その男は花魁の二股をしたらしい。ヨシワラでは二股はご法度。

このヨシワラの不文律を破る人間には花魁からのキツイおしおきがあったりする。

ヨシワラで薬師は重宝される。  
性病、避妊などなど。

その店に気に入られれば、だいたいお抱えの薬師になる。

「そりゃご苦労」

「お抱えって言っても、私はその他の娼館でも仕事してるし。ずっとあそこだけに居られないわ」

さすが一流の薬師。超売れっ子。

強烈な出会い以来、違う街や森の中でばったり会ったりとかやけに縁があり、いつの間にか気を許せる友人になっていったのだ。

昔の出来事に思いを馳せていると部屋がノックされ、ユエがお盆にコップを3つ乗つけて入ってきた。

コップの中の黒い色した液体がシュワシュワと音を立てている。

……ただのコーラであるが。

「お待たせしましたー」

カーラ曰く、『ユエの初めてのおつかい』らしい。

部屋に上がってきて、シオンと色々話し込む前まで、注文の方とお金の使い方をレクチャーしていた。

「うん、ちゃんと買ってこれたね」

「はい！大丈夫でした！」

「うむ！重畳、重畳」

そう言って、カーラはお盆からコーラを取ってゴクゴクと飲んだ。

3人は明日からの予定を確認し、シオンは男だから当然別室へ帰っていった。

## 第6話（後書き）

言葉のお勉強講座（笑）  
重畳……この上なく満足であること。

## 第7話

一夜明け、3人は街の裏通りにある武器屋に来ていた。

大通りにも武器屋は何軒あるのだが、今居るこの店は知る人ぞ知る名店と言われている。値段は高いが、良いものを出す。

ちなみに、知っていたのはシオンでなくカーラだ。

ガランガラン、と店の扉に付けられているベルが来店を知らせる。

「悪いが今日はもう店じまいだ」

店の奥から出てきたのは、頬に古傷のある大男。髪に少し白髪が混じっている。昔冒険者としてブイブイ言わせた口か……

ブイブイって死語か……？

どうやらとことん機嫌が悪そうだ。

「まだ朝だよ、おっさん。……酔ってるね。今日はこの子にナックル系の武器を売って欲しくてね」

カーラはそう言って、懷から取り出した薬紙をそつと机に差し出した。

チラリと店主は視線を机に向け、次にカーラに視線をやり、薬紙を持つと店の奥に引っ込んでいった。

「カーラ……今のは？」

何かの取引材料だとシオンは思った。しかし、返ってきたのは意

外な言葉だった。

「ああ、二日酔いに効く胃薬」

……差し出し方が紛らわしいです。

ちなみに、来るたびにあんなやり取りをしているそうだ。

「おう！待たせたな！」

10分ほどして、バターンという扉を壊しかねない音と共に、機嫌も顔色も良くなった店主が出てきた。

「で？なんだっけ？」

「……この子に合うナックルをくれ」

店主が冗談だろ？という目でユエを見た。

真っ白なワンピースに細い腕。どう見ても後衛向き。彼女に前衛武器のナックルは似合いそうにない。

服は後で買いに行く予定です。

シオンもカーラも始めは後衛職をさせる気でいた。朝のあの事件がなければ。

3人は朝食を食べに1階にある食堂に降りて来た。

冒険者御用達の安い宿の為、朝から遠出をする冒険者達がひしめき合っている。

空いた席に腰掛け、早速注文をする。パンとハムエッグとサラダのセットか、飲み物はリンゴのジュース。

注文した品はすぐに来た。まるでリスのように頬に食べ物を詰め込みながら食べるユエ。

可愛らしいです。

ほのぼのした朝食だったのに、急にカーラの機嫌が悪くなる。シオンがカーラの視線をたどると、ニヤニヤした男たちに目が止まる。

シオンは慌てた。

「お、落ち着け！相手は人間だ！殺られる前に殺らんでくれ！」

シオンの心配を知らない野郎共は勇敢にもカーラとユエに話しかけた。

「よう、ねーちゃんたち。そんなダサイ男とつるんでないで、俺らと冒険にでもいかねえか？」

そう言った男はカーラの肩を抱き、頬を撫で話しかけた。他の男

も同じようにユエに触る。

カーラの足の下の床板がミシリと軋む。あ、こりゃ駄目だな……とシオンは思ったのだが、今回はカーラの手が出ることはなかった。なぜなら……

「……っつ！食事の邪魔をするなああっつー！！」

ユエの拳がクリーンヒットした男は、切りもみしながらふたつ向こうの机まで飛んでいった。

お見事！

ユエは振り向きざまに、カーラに絡んでいた男の顔面に肘鉄を食らわす。

メキッという音と共に吹っ飛んだ。

「まったく！」

憤慨しているらしいユエは、チラリと周りの男どもを見た。ザザッと距離をとる彼ら。そして顔を見合わせると、倒れてる男ふたりを連れてそそくさと逃げていった。

ユエは何事もなかったかのように、食事を再開する。

「凄い威力だわ、あの拳……」

呆れたようにカーラが呟いた。

「武器さあ、ナックルでもいけるんじゃない？」

「そうね……でも、恐怖で脚がすくんでも困るけど。どーだろ？」

朝食を食べ終えた彼らは、近くの森に入った。ユエの武器はとりあえずロッドで。水系の魔術は使えるらしいので、それで。

なのに、魔術を使わず杖で殴るといふ新しい使い方をした。ちなみにユエは殴りずらいとのたまった。

もうひとついうと、ロッドは二度と使えない状況です。拾い物だから良いけど。

……彼女の武器は殴れるやつ決定で。

「あー、これがこれ。それがこつち。」

店主が出してきたのは3種類。

ひとつは金属の輪が連なっていて輪に指を入れるだけのもの。

もうひとつは革製の指あきの手袋状で、甲の部分に金属が入っているもの。

最後のは、肘の部分まで全て金属のもの。

一番最後のが防御まで考えた場合一番良いのだが、ショッキングピンクが目痛い。

「何このドピンク……」

「これか！これは俺の自信作だ！」

アズロラマカイトという鉱石で出来ている。2種類の鉱石が混じりあっている石で、軽いし、強度も申し分ない。大型ドラゴンと戦う予定はないのでこれで十分だろう。ピンクでさえなければ。

塗料で塗ってある様なので、落してもらったことにした。店主は渋ったがカーラが脅した。

やり方は言わないでおく。

「で？いくらだ？」

「25万ルク」

シオンはカーラの腕を引っ張り、店の隅に移動する。ユエがどうしたの？という表情をしてふたりを見た。

シオンは何でもない、という愛想笑いで返す。

「俺の全財産は30万ルクだ……これ買ったら、無理！生きていけない！」

「あはっ！防具も買ったら無一文ね！」

「……一蓮托生。お前も出せよ？」

「ええー……」

「えー、じゃない。保護者はお前！」

隅でこそそとしたお金の相談は、武器はシオンが。防具はカーラが出すということで話が付いた。

後で、クエスト受けてお金稼がないと……シオンは財布を見ながらため息を付いた。

「シオン。ため息は幸せが逃げますよ?」

分かっているのかいないのか。ユエの少しずれた慰めが憎たらしい……

## 第7話（後書き）

アズロラマカイトとは、パワーストーンの種類です。  
青と緑の石です。……名前のみお借りしました。

貨幣の話はまた次回（笑）

……別に面倒臭いと言ってるわけじゃ無いんだからね！  
大丈夫ダイジョウブ！ちゃんと考えてアルヨ（´・`・´）

## 第8話（前書き）

通貨は、ルク＝円で考えてください。

金銀銅計算だとこんな感じ

半銅貨1枚：100ルク

銅貨1枚：1,000ルク

半銀貨1枚：5,000ルク

銀貨1枚：10,000ルク

金貨1枚：100,000ルク

晶貨1枚：1,000,000ルク

にしておこう（笑）

## 第8話

シオンの目の前には、黒い布地のふわりとしたスカートに白いレースがふんだんにあしらわれたワンピース、まるで海の中のような深い青のシルクの生地のスリットドレス、オレンジの布に可愛くリボンがたくさん付いているがスリットがきわどい位置まで入っているドレス……などなど。

カーラお勧めの洋服店『マドンナ』。

このお店のキャッチフレーズは『無いものは無い!』。

店内はすごい量の洋服や布が場所を占めていた。ちよつと背中が棚に当たったものなら上から布や箱が落ちてくる位である。

「うーん、スカートじゃパンツ見えちゃうよネー」

「ロングスカートなら見えないんじゃない？」

「でもそうすると戦い辛いとかあるでショー」

「んーそうだよねえ。じゃ、やっぱりスパッツ、ミニスカ、スリットで」

「あの……普通にスポンで良いんですが……」

「「却下」」

「うっうっ……」

カーラと大柄の筋肉質の（たぶん）女性の店主がミニスカを手には熱弁をふるっている。

ユエはあくまで普通の格好を望んでいるようだが、どうやら無理そうだ。

ちなみにシオンは不参加。女性物の洋服選びは無理だと言い、邪魔にならないように壁に張り付いて様子を見ている。

1時間ほどお店に居座り、黒い七分丈のＴシャツに、ジーンズ素材のサロペット、黒のニーハイ、編上げのショートブーツをお買い上げた。

サロペットはユエの粘り勝ちでズボンになった。かなりのミニ丈だが。

今は中央公園の噴水の前に3人で座っている。

子供たちが遊びまわっているし、恋人たちが仲良く笑い合っている。のどかな光景だ。

お昼時なので、あたりにはおいしそうな香りが漂っている。

おいの誘惑に負けたシオン達の手にはホットドックが握られていた。

「あ、そうそう。これあげるわ。」

カーラはホットドックを食べ終わると、自分の背負っていた薬箱の引出しから、ポーチを取り出した。

そしてそのままユエの腰にベルトで固定する。

茶色のそのポーチはユエの格好によく似合っていた。

「これは？」

「ふふふふ……カールさん特製の四次元ポケットよ!!」

四次元ポケット。

どんな大きさ・重さの物を入れたとしても外見も重さも変わらない、究極の冒険者アイテム!!

入れたものを思い出しながら取り出せば、出すことができる。

かなりの便利アイテムだが、上位ドラゴン白龍の髭とか超一流の冒険者でもめったに手に入れる事ができない素材でできている。希少価値の高いレアアイテムだ。

「レアアイテムを簡単に作るな。譲渡するな。……ぼくにも下さいおねがいします」

土下座しそうな勢いで頼み込むシオンに、仕方ないなあと言いつつも、薬箱からユエのよりも少し大きめの斜め掛けのカバンを取出して彼に渡す。

「中に縫い付けてある晶霊石は取っちゃだめよ」

「取ったらどうなる?」

「袋を破きながら中身が飛び出てくる」

いったいどんな魔術がかかっているのか気になるところだが、考えないようしておく。

晶霊石が10個ほど飾りのように並んで付いているので、面倒くさそうな術式が絡まって作られているんだろうな、と思うだけにしておく。

シオンは歩き出したカーラの二の腕を取った。  
疑問の表情を浮かべた彼女に笑いかけながら言う。

「ありがとな」

「ん」

（わああああ……なんだか甘い雰囲気が漂ってきます……公園の真  
ん中でそれはないでしょう！）

ユエは周りを見回すと、案の定、おばちゃんやおじちゃんがほ  
えましく見守っていた。

この二人は顔が良いから立っているだけで目立つ。

本人たちはそのつもりが無くても、見た目ラブラブなカップルに  
なっているので、傍から見ると恋愛映画を見ている気分になる。

シオンの笑顔が悪いのか、はたまたカーラの照れ笑いが悪いのか。

（こ、これは……色々苦勞しそうです。がんばれ自分！）

仲良く笑いあう彼らを見て、そつと溜息を吐き、恥ずかしいので  
しばらく近づかないでおこうと心に決めたユエだった。

## 第8話（後書き）

自分の全財産を前書きを基に計算…

「……少なっ！」

ポケットに入るよ（笑）叩いても増えないみたい。

ハリ○タのうんとか銀行のハ○ー君の金庫の様には一生かかっても無理。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7153u/>

---

女神の居ぬ間に

2011年10月9日09時03分発行